

地域のスポーツ・クラブのメンバーの満足要因の分析

福元 和行・遠藤 勝恵*

(平成5年6月21日受理)

研究目的

スポーツ・クラブが成立し、維持・発展していくためには様々な条件が整備されていることが必要であるが、クラブのメンバーの満足という点には特別な配慮が払われている必要がある。クラブの活動を支えるための条件は様々であるが、ある1つの条件だけをとりあげても、満足している人も存在すれば、不満足な人も存在し、満足とは極めて主観的で、個人差が大きいと言わなければならない。また、クラブ生活に直接影響するような事柄についての満足もあれば、クラブ生活にさほど影響しないような満足もあり、満足にも軽重があると考えられる。

本研究は地域のスポーツ・クラブのメンバーのクラブ生活の満足・不満足をとりあげ、スポーツクラブ生活の満足・不満続を規定している要因を探ることを研究目的としている。

研究方法

1 データの収集

公営体育館を利用して活動しているスポーツ・クラブのメンバーに対して、留置法による調査を行った。145名の回答を得たが、標本の構成は表-1の通りである。

調査は1992年4月に実施した。満足内容の測定には40項目を設定し、「非常に満足」から「非常に不満足」までのワーディングによるリッカート尺度の5段階評定を用いた。

2 データの分析

データの解析には3つの分析方法を用いたが、クラブ生活の満足・不満足と各変数との関係を探るためクロス集計を行なった部分、及びPEARSONの相関係数を求めた部分については、「非常に

*山口大学教育学部

表一 1 標本の構成

		N	%
1. 性別	男子	89	63.1
	女子	52	36.9
2. 年齢	10代	2	1.4
	20代	57	40.7
	30代	26	18.6
	40代	21	15.0
	50代	16	11.4
	60代	18	12.9
3. クラブへの参加目的	技術を高めるため	17	12.9
	スポーツを楽しむため	70	53.0
	仲間と楽しく運動するため	21	15.9
	健康づくりのため	24	18.2
4. クラブへの在籍年数	半年未満	8	5.8
	半年以上1年未満	7	5.1
	1年以上2年未満	14	10.1
	2年以上3年未満	12	8.7
	3年以上5年未満	25	18.1
	5年以上	72	52.2
5. クラブ種目についての学生時代の運動経験	クラブの種目と同種目のクラブ(運動部)に入って運動していた	68	51.1
	クラブの種目とは異なった種目のクラブ(運動部)に入って運動していた	5	3.8
	クラブ(運動部)には入っていなかったが授業で教わった	8	6.0
	上記に該当せず休み時間や放課後個人的に行った程度である	14	10.5
	学生時代、全く行ったことがなかった	38	28.6
6. クラブ内での役割	リーダー・世話人	23	16.3
	会計・連絡係	8	5.7
	役職なし	110	78.0

7. クラブの種目	バドミントン	35	28.9
	バレーボール	5	3.7
	軟式野球	11	8.1
	硬式テニス	19	14.1
	卓球	7	5.2
	ソフトテニス	30	22.2
	その他	28	20.7
8. 所属クラブの活動目的	試合に勝つ	27	19.7
	スポーツを楽しむ	89	65.0
	健康づくり	19	13.9
	その他	2	1.5
9. クラブのメンバー数	10人未満	22	15.7
	11人以上20人未満	50	35.7
	20人以上30人未満	17	12.1
	30人以上40人未満	14	10.0
	40人以上	37	26.4
10. 指導者の有無	いる (クラブのメンバー)	65	46.4
	いる (クラブのメンバー以外の人)	7	5.0
	いない	68	48.6
11. 練習計画の決定方法	指導者が決定する	12	8.6
	リーダー・世話人が決定する	47	33.6
	指導者とリーダー・世話人が相談して決定する	16	11.4
	クラブ員全員で決定する	49	35.0
	その他	16	11.4

満足」から「非常に不満足」までの5段階評定を「満足」「わからない」「不満足」の3段階評定に統合し直し、分析を加えた。なお、クロス集計結果の有意差の検定には χ^2 検定を用いた。

また、林の数量化理論Ⅱ類を使用した部分については、カテゴリーへの反応数が少ない時、そのスコアが過重の値をとったり、クロス集計の結果とは逆符号の値が出たりすることがあるため⁽⁴⁾、クロス集計及び相関係数を求めた際に使用した3段階評定を「満足」「わからない・不満足」の2段階評定に統合し直し、解析を行った。

外的基準は、クラブ生活に満足している群（満足群）と満足していない群（不満足群）を設定し

た。解析の条件は、外的基準 $T = 2$ ，アイテム数40，カテゴリ総数80である。

結果および考察

1 外的基準と説明変数のクロス集計結果及び相関

(1) 目標の達成

目標を達成出来たか、出来なかったかによる満足、不満足と外的基準（クラブ生活の満足、不満足）の関係を見ようとしたのが表-2である。設定した7変数のうち、スポーツの楽しさの享受についてのみ、有意差が見られた。スポーツの楽しさを味わうことが出来て満足である、と答えた人には、クラブ生活に満足している人が多く見られ、楽しさを味わえなくて不満足と答えた人には、クラブ生活に満足していない人が多く見られる。クラブ生活の満足にスポーツの楽しさの享受が関係していることがわかる。他の変数である「技術の向上」「体力の向上」「知識の習得」などについては、有意な差が見られなかった。

(2) 施設

施設に関連した変数と外的基準との関係を見ようとしたのが表-3である。「施設の利用手続きは簡単であり満足している」「施設の確保は容易であり満足している」「施設の利用料金は適当であり満足している」と答えた人では、クラブ生活に満足している人が多く見られ、不満足と答えた人には、クラブ生活に満足していない人が多く見られる。一方、他の変数である「施設の広さ」「施設の

表-2 外的基準と目標達成関連変数のクロス集計結果及び相関

要因群	説明変数	クロス集計		相 関	
		x^2 値	P	相関係数	P
目標の達成	スポーツの楽しさ	8.019	*	.235	**

** P < .01 * P < .05

表-3 外的基準と施設関連変数のクロス集計結果及び相関

要因群	説明変数	クロス集計		相 関	
		x^2 値	P	相関係数	P
施設	施設の利用手続き	10.072	**	.247	**
	施設の確保	8.201	*	.240	**
	施設使用料金	8.870	*	.208	**

** P < .01 * P < .05

表一 4 外的基準と練習関連変数のクロス集計結果及び相関

要因群	説明変数	クロス集計		相 関	
		χ^2 値	P	相関係数	P
練習	運動量	36.034	***	.454	***
	練習内容	30.936	***	.389	***
	練習時間の長さ	12.618	**	.298	***
	練習の曜日・時間帯	9.670	**	.155	*
	練習の快適さ	24.312	***	.396	***
	練習での指導	6.118	*	.209	**
	練習の雰囲気	8.240	*	.182	*

*** P < .001 ** P < .01 * P < .05

照明の明るさ」「施設の近さ」については、有意な差が見られなかったが、施設の確保、利用手続き、利用料金という、施設の利用のしやすさと関連した変数がクラブ生活の満足と関係しているという結果になっている。

(3) 練習

練習と関連した変数を見ようとしたのが表一 4 である。「運動量は適当であり満足している」「練習内容は適当であり満足している」「練習時間の長さは適当であり満足している」「練習の曜日・時間帯は適当であり満足している」「練習は気持ちよく快適であり満足している」「練習で困った時教えてもらえて満足している」「練習の雰囲気がよくて満足している」と答えた人は、クラブ生活についても満足している人が多いという傾向が見られた。練習活動は、クラブ生活の大きな柱であり、練習活動のあり方がクラブ生活の充実を大きく左右することを示した結果であると言える。

(4) 運営

運営に関連した変数と外的基準との関係を見ようとしたのが表一 5 である。運営方法の決め方、練習計画の決め方、メンバーの役割分担、クラブの人間関係、試合への全員の出場、クラブの経費の負担、の 6 変数に有意な差が見られ、これらの各変数に満足している人は、クラブ生活にも満足している傾向が見られた。

(5) 指導者

指導者に関連した変数と外的基準との関係を示したのが表一 6 である。指導者による練習方法の指導、指導者による快適な練習に対する配慮、指導者によるクラブの抱える問題の解決のための努力、の 3 変数について有意差が見られた。つまり、これらの各変数について満足している人に、クラブ生活に満足している人が多く見られた。なお、指導者による技術向上のための指導、指導者による練習計画の立て方の指導などの変数については、有意差が見られなかった。

表一五 外的基準と運営関連変数のクロス集計結果及び相関

要因群	説明変数	クロス集計		相 関	
		χ^2 値	P	相関係数	P
運営	運営方法の決め方	12.448	**	.281	***
	練習計画の決め方	14.603	***	.290	***
	メンバーの役割分担	12.387	**	.209	**
	クラブの人間関係			.202	**
	試合への全員の出場	7.804	*	.222	**
	クラブの経費負担	6.268	*	.210	**
		*** P < .001 ** P < .01 * P < .05			

表一六 外的基準と指導者関連変数のクロス集計結果及び相関

要因群	説明変数	クロス集計		相 関	
		χ^2 値	P	相関係数	P
指導者	指導者による練習方法の指導			.146	*
	指導者による快適な練習に対する配慮	8.190	*	.221	**
	指導者によるクラブ問題解決への努力	7.452	*	.185	*
		*** P < .01 * P < .05			

2 要因分析の結果

(1) クラブ生活の満足度の規定要因

表一七は要因分析の結果を示したものである。相関比は0.426であった。レンジはレンジの範囲が大きい変数ほど、そのどのカテゴリーに反応するかで予測値が大きく変わり、それだけ外的基準に対する影響が大きいと考えられることから、各変数の外的基準に対する影響の大きさをあらかじめ目安として用いられる⁽²⁾が、しかし、レンジは各カテゴリーに対する回答数に大きな差がある場合、実際以上に大きな値となる⁽³⁾ことがあるため、レンジの大きさにより要因の規定力をみることには信頼性の面で疑問がある。そのため、偏相関係数により考察することにしたが、偏相関により各要因の規定力をみると、練習の曜日・時間帯が最も強く、次いで指導者による個人目標達成のための指導、施設への近さ（遠近）、運動量、練習時間の長さ、指導者による技術指導、マナー・行動の仕方の習得、指導者による練習方法の指導、指導者による練習計画の立て方の指導、同程度の実力の人との練習、という順位になっている。上位10アイテムの内訳は、練習に関して4アイテム、指導者に関して4アイテム、施設及び個人目標の達成に関して各々1アイテムとなっており、クラブ生活の満足、不満足に対する練習活動及び指導者の影響力の強さが伺われる。また、マナー・行動の

表一七 要因分析の結果

アイテム	偏相関	順位	カテゴリー	カテゴリー・スコア	レンジ	順位
練習の曜日・時間帯	.255	1	満足	— .315	1.075	5
			わからない・不満足	.760		
指導者による個人目標達成のための指導	.243	2	満足	—1.484	1.872	1
			わからない・不満足	.388		
施設の遠近	.221	3	満足	— .255	.870	7
			わからない・不満足	.615		
運動量	.201	4	満足	.354	.972	6
			わからない・不満足	— .618		
練習時間の長さ	.198	5	満足	.282	.789	8
			わからない・不満足	— .507		
指導者による技術指導	.191	6	満足	— .826	1.314	3
			わからない・不満足	.488		
マナー・行動の仕方の習得	.190	7	満足	— .386	.711	9
			わからない・不満足	.325		
指導者による練習方法の指導	.185	8	満足	.884	1.375	2
			わからない・不満足	— .491		
指導者による練習計画の立て方の指導	.177	9	満足	.978	1.268	4
			わからない・不満足	— .290		
実力の同程度の人との練習	.176	10	満足	.267	.680	10
			わからない・不満足	— .413		

(注) 順位は、すべての要因(40アイテム)中の順位であるが11位以下は省略した。

(相関比 .426)

仕方の習得が、クラブ生活の満足、不満足を規定している事実は、注目されてよい。

(2) カテゴリー・スコアと寄与の方向

カテゴリー・スコアは各カテゴリーがクラブ生活の満足、不満足のどちらの方向にどれだけの強さで影響を与えているかを見ることを可能にするものであり、本研究では、カテゴリー・スコアが正の符号の場合、スポーツ・クラブ生活に満足している、という方向に寄与し、負の場合、クラブ生活に不満足である、という方向に寄与することになるが、カテゴリー及びカテゴリー・スコアは表一七の通りである。10アイテムのうち、運動量、練習時間の長さ、指導者による練習方法の指導、

指導者による練習計画の立て方の指導、同程度の実力の人との練習、の5アイテムについては、各アイテムの満足している人のカテゴリー・スコアがクラブ生活に満足しているという方向へ向いている。また、わからない、不満足と答えた人のカテゴリー・スコアがクラブ生活は不満足である、という方向に向いており、妥当な結果と見る事が出来る。しかし、残りの5アイテムについては、カテゴリー・スコアに予想とは逆の符号がついており、予想とは逆の結果を示している。その原因については、各カテゴリーへの回答数に大きな差がある場合、途方もない大きな値や、外的基準とそのカテゴリーとのクロス表から期待したものとは逆の符号をもつ値が与えられることがある⁽⁴⁾と言われているため、符号の逆転が見られる指導者による個人目標達成のための指導について検討してみると、満足というカテゴリーへの反応数は29、わからない、不満足というカテゴリーへの反応数は111であり、両方の反応数に大きな差が見られる。そして、この差が符号の逆転をもたらしたと考えられる。

要 約

本研究は地域社会におけるスポーツ・クラブのメンバーの満足度を規定する要因を探ることを目的とするものであったが、結果を要約すると以下のようになる。

1. クラブ・メンバーのクラブ生活の満足度、不満足度と説明変数との関係を探るため、クロス集計及び相関係数を求めたが、20の変数でクロス集計あるいは相関係数の片方又は両方に有意差が見られた。内訳は活動目標の達成に関連した変数では、スポーツの楽しさに有意差が見られた。また、練習に関連した変数では、運動量、練習内容、練習時間の長さ、練習の曜日・時間帯、練習の快適さ、練習での指導、の7変数に有意差が見られた。運営に関連した変数では、運営方法の決め方、練習計画の決め方、メンバーの役割分担、クラブの人間関係、試合への全員の参加、クラブの経費負担、の6変数に有意差が見られた。指導者をめぐっては、指導者による練習方法の指導、指導者による快適な練習に対する配慮、指導者によるクラブ問題解決への努力、の3変数に有意差が認められた。

2. 林の数量化理論II類によりスポーツ・クラブ生活の満足、不満足の規定要因を探ろうとしたが、カテゴリーへの反応数の大きさに不安があるため、レンジではなく偏相関係数を考察の対象とした結果、上位10アイテムの内訳は、練習に関するアイテム4、指導者に関するアイテム4、施設及び個人目標の達成に関するアイテム各1となり、練習及び指導者の要因がクラブ生活の満足、不満足を強く規定する要因であることがわかった。

カテゴリー・スコアと寄与の方向は、妥当と思われる結果も見られたが、符号が逆転していると判断される結果も見られた。カテゴリーを統合し、カテゴリー数を減らすことにより、カテゴリー

当たりの反応数を増加させようとしたが、カテゴリー・スコアの符号が逆になっている部分は、カテゴリーへの反応数が少ないことによると考えられるので、データ・サンプルを増やし、カテゴリー・スコア符号の逆転が起きたり、過重の値が出現したりしないようにしなければならない。また、データ・サンプルを増やすことは、カテゴリー数を増やすことを可能にし、よりきめ細やかな分析を可能にするであろう。

引用・参考文献

- (1) 金崎良三他：「スポーツ行動の予測因に関する研究(1)」, 健康科学, 第3巻, 1981, P. 68
- (2) 山田文康：「数量化Ⅰ・Ⅱ類」, 渡部洋編著『心理・教育のための多変量解析法入門—基礎編—』福村出版, 1991, P. 140
- (3) 山田文康：「試験問題の難易度を予測する」, 渡部洋編著『心理・教育のための多変量解析法入門—事例編—』, 福村出版, 1991, P. 125
- (4) 多々納秀雄他：「スポーツ参加の多変量解析(Ⅰ)」, 健康科学, 第2巻, 1980, P. 109
- (5) 宇土正彦他編著：『体育経営管理学講義』, 大修館書店, 1989
- (6) 社会体育研究会：『スポーツクラブ』, 新宿書房, 1979
- (7) 前川峯雄他編：『指導者のためのスポーツ・クラブ』, プレス ギムナスチカ, 1979
- (8) 森川貞夫他編：『スポーツ社会学講義』, 大修館書店, 1988
- (9) 宇土正彦：『体育管理学』, 大修館書店, 1983
- (10) 桑野豊他編著：『現代スポーツ指導者論』, ぎょうせい, 1988

